我執を抜こうか、命をとろか

1

神の眼からみればそれは恐らく、互いが互いを充分に知悉していないが故の、誤解の時間だったともみえようし、二人が結びつくための少々むごいが試練の期間を与えたものとも解釈し得よう。互いが結びつくためには、二人の背景は余りにも常識はずれに大きく、且つ各々の自信は過剰に過ぎて、相手方を知るに眼を曇らせてもいた。ニワは山岸の途轍もない世界へのいざないの手に気づくことはなかったし、山岸は山岸でニワの並はずれた人間的器と能力に、未だ充分に自覚することもなかったのである。

そのためのいわばあがきとあせりが、仰々しい波音をたてて渦巻いていたのであり、神は自らそのしぶきを全身に浴びつつ、自己の痛みとして眺めておられたに相違ない。しかしそれはあくまで神の眼であって、現実に生きている当時の二人には、ただ絶望と嫌悪とでしかあり得ず、とりわけ結婚間もないニワには、絶望と嫌悪の前に何が何やらさっぱりわからなかったものである。

朝「いってらっしゃいませ」とできるだけ愛想よく夫を送りだす。ホッとしていると、そこへ夫が逆戻りしてくる。そしてそこらにあるものをあたり構わず蹴散らかす。四十度の熱がでてウンウンう

なっている時でも、「起きろ」と怒鳴りつける。ようやく送りだしてヤレヤレと、室の鏡に向かって「どんな顔しているやろ」と自分の顔を眺めていると、途端に夫が現われて、「これは何だ！」と鏡を蹴飛ばしたこともあった。

こうなるとニワには何が夫の機嫌を損じているのか、さっぱりわからなかった。何しろ、口でいうより先に行動に出るのであるから。家主の中林は山岸を、手を合わせたいくらい信奉しているし、この辺では人望家として知られている。ニワとすれば、そんな人に山岸の行状をみせたくない気持ちがある。その心理につけ込んで、山岸は余計周囲に聞こえよがしに暴れ放題に暴れるのである。

山岸が山から帰ってきて、ニワがふくれっ面でもしていれば話はわかるが、そうでもないのに、山岸は瞬間的に何を感じてか、いきなり廊下に靴のまま上がってきて、よその家の障子をばんばん蹴倒す。「お帰り」をいうどころか、そっちの方を先に始末しなければならない。オーバーを脱ぐや否や、パッと火鉢の上に叩きつけたりするので、慌ててオーバーを拾い上げる。すると山岸は今度はマフラーをとって投げる。その次には服を脱いで投げつける。それでも止まずにその後で、出してある料理の並んだお膳をひっくり返すのである。そんな日が間断なしにつづくのである。

こうした山岸を一体どう解釈すればいいのかであるが、もとを質せば山岸の側に問題があることで、もつれにもつれた麻糸のごとき状況の糸口には複数結婚の問題があった。それは自らの信ずる理論であるとはいえ、山岸がY子とニワとの複数婚を願い、それをニワが容易に認めようとしないところで、摩擦が生じることは知れたことであった。

もっとも山岸は結婚にあたってニワに約束した通り、最初から複数婚を願っていたわけではないらしい。初めはY子にもいい聞かせ、話し合いは成立し、無事ニワとゴールインということになった。

しかしゴールインするや否や、今度はY子が山岸と離れるくらいなら、死ぬのなんのと口ばしり始めたものだから、山岸は大いに慌て、年来の理論通り一夫二婦の複数婚の道を実行せんとした。

ところがこれに対して、ニワの側がまた断固として応じない。それもY子と争って、否が応でも山岸をとるというのならまだしも、「複数婚を成りたたせたいなら私を除いてやって下さい。私は辞退しますから」というのであるから、どうしようもない。山岸にとっては、如何にしても現実的な実行家のニワが必要であった。山岸が求愛して、「私は名刀の鍛冶屋、あなたは使い手」としたのもそのことであって、全人革命のためにニワはどうしても不可欠、と判断した挙句の結婚だったのである。

それでも結婚した当初はまだ望みを託していた。自分の知的方法論によって、観念転換は可能であると思っていた。女性とはいえニワは、男のような軟らかい理解力を持っていたし、複数婚に切り替えさせることは比較的容易であると思っていた。

事実、ニワは次第に理解を示して、山岸が四日市に通うことを黙認していた。もともとニワは古いタイプの女ではあるが、古いタイプの女であるが故に、「妾を持つのは男の器量」ぐらいの気持はあったのである。少女時代から賢妻の母にもそのように聞かされてきた。織田信長の妻おのう夫人は自分に子供がないことを案じて、妾腹に子供をつくらせようとしたということであるが、そのような生き方にも感ずるところはあった。その意味では複数婚も必ずしも認めざるところではなかったが、如何せん、山岸のニワに対する仕打ちから、夫への嫌悪感が先に走る。それにニワの極端な潔癖性が性の復合関係を容易になじませようとはしないのである。

後にはニワはもし複数関係が成立し得るものとしたら、三人なら三人のうち誰一人欠けても、残った二人の関係が保ち得ないような世界にあってのみであるとしたが、つまりはニワにはそのような条

件が満たされていなかったのである。ニワにとってY子は、如何に山岸が讃えようと複数婚の相手としては役不足の思いであった。

しかし直接原因として発した複数婚も、やがて疑似複数関係が成立して解決したかにみえたが、疑似複数関係であることによって以前より増して山岸の心は痛んだ。数日毎にY子からきてくれとの電話で、山岸は四日市へ通い、聞きわけのないY子を前にして不快さはつのり、中林家に帰宅して、今度はニワに当たり散らすのである。そんなふうな関係になってみれば、いかに怒りを知らぬニワといえども、夫に対する嫌気がでてくるのも当然であった。

ましてY子の前で悪口三昧、「お前のところへ行きとうて行きとうてならんのやけど、こいつがゆかせんのや、こいつが……」とか、人毎に「ニワ子さえ承知してくれたら、ニワ子さえ承知してくれたら……」といわれるのでは、その真意を計るよりも山岸の人間的品性を疑わざるを得ない。しまいにはニワにとって複数婚の問題よりも、山岸の姑息な人間性に対する嫌気で離れたい一念となっていた。ただしニワは、山岸が自分を愛していることはわかっていた。山岸は時折「貴様は俺の何だ！」といったりする。そういう時にかしこまって、「はい、私は山岸巳代蔵の妻です」と答えると、「もう一回いうてみろ」と促す。

「はい、山岸巳代蔵の妻です」

「本当だな」

「はい、本当です」

というと、途端に山岸は哀切な調子になって、人前であろうが何であろうが、「そうか、そうか、そうか」と抱きついてきた。「そや、そや、そやったな」と頬ずりしたり、街中でもいやがるニワに

キスしたりする。

山岸のニワに対する愛情の示し方は、どこか悲劇的で且つ道化じみておかしいのである。そういう山岸にまたニワは、どうにも尻がこそばゆくてついてゆけない気持だった。かくしてニワの即刻でも山岸の傍を離れたい心情はわかるとして、山岸の側に寄ってみれば、それはそれで理由のあることで、複数婚の理論を抜きにしてみても、心情的に納得できる面が多々あるのである。

山岸はニワとY子を比して、「ニワは正式の料理」で「Y子はお茶漬けの味」と評したことがあるとか。毎日フルコースの料理では、たまには淡白なのり茶漬けでも食べてみたくなるのは至極当然の心理である。むろんお茶漬けだけでは足りるはずもない。贅沢のようではあるが、人間のアンビヴァレンツな心情を満たすためには両方必要であった。どちらも欠けてはならないのである。

山岸はまたY子をやすらぎとして欲しいといういい方をしていた。山岸はニワとやりあうといっても、日がな一日争っているわけではない。その辺がこの夫婦の奇妙なところで、社会革命の仕事の話をしている限りは、夢中になって互いに構想やら人の手当てやらについて話しあっているのである。それが第三者の眼には何事とも知れない、ある瞬間に、突然事態が急変して、二人の間は真っ二つに引き裂かれてしまうといった具合であった。

つまり山岸にしてみれば、ニワとの間には休みというものがない。ニワと会っている限りは仕事と愛情問題で緊張の連続であり、緊張を解きほぐす休みの部分でY子を欲していたともいえる。

むろん常識的に勘ぐってみれば、旧弊の尾を引く男としての山岸、あるいは夫としての山岸には、ニワはあまりに重過ぎたということかもしれない。女あるいは妻というものは、もっと手軽なものである必要がある。山岸は後に、「私とY子とを合わせた電力が百ワットとすれば、ニワはその数百倍

の数万ボルトものボルテージの高さを持った高圧電力みたいなものやから……」と洩らしていたそうであるが、その高圧電力を高圧電力と知るべく、まだ結ばれて日が浅いが故に認識が欠けていた。そのために山岸は徒らに無茶苦茶に暴れ廻るという形で、ニワのボルテージの高さに追いつこう、追い抜こうとしていたのだともとれる。

ボルテージの高さばかりでなく、ニワの人間的資質についても山岸は大いに見誤っているところがあった。ニワの優越感と劣等感から解放された特別な心性は、これまでの女の体験にはないものであった。ともすれば、ニワの容易なことではへこたれない意志と自信は、慢心とも受けとれる。執着とも受けとれる。山岸はその慢心と執着にこそ問題があるとみていた。

なぜなら我執とはそもそも執着の心である。生命の苦悩の根源を知悉した仏智に従えば、自分の中心に実体的な我があると考えて、これに執着するが故にすべての悩みが生ずるとされる。我執は我見ともいい、自分の意見に執着して離れないことをいう。それを拡大すれば、意見のみならず、感情、感覚的固着そのものが我執ということになる。そこに彼が信仰を排する理由があるので、信仰とは即ち固着心理であって、山岸とすれば否定しなければならない。

平たくいえば何かについて思い込むこと、思い込んで疑わないこと、頑固といわれる性格もまた我執ということになる。ニワもまたそれで、頑固さにおいて複数婚の拒否につながるとみたのであろう。そこで山岸は複数婚は一時棚上げして、ニワの頑固観念自体をはずすことを考えた。頑固観念さえはずせば、人は万物から離れて自由となり、複数婚もまた容易に認めることができるようになろう——と。そういう計算の下に山岸は結婚後、ニワの頑固観念をとり除くべき実践研鑽に取り組んだ。実践研鑽というのは、研鑽には理論研鑽、方法研鑽、実践研鑽の三種あって、「出精平使」のように

文字通り実際行動による自己研鑽の仕方である。その実践研鑽として山岸は新婚の妻に対して、咄嗟にあるいは念入りに工夫したさまざまなやり方を試みた。

ある日、娘の美和子が、当時住まいしていた菰野の旅館に親夫婦を訪ねたところが、二人とも一糸まとわず素っ裸になっているのでビックリしたということであるが、これはニワのとりわけ几帳面で、潔癖で、素肌をみせたりするようなだらしのないことが嫌いな点に眼をつけた山岸が、一層裸になって暮らしてみようということで実現したものである。

例えどんなに素晴しいことであっても、納得できないことをできないとするのは、それもまたきめつけであり、頑固観念には相違ない。それがわかったからこそニワは、さっさと夫の要求する通り素っ裸になった。しかし現実に裸になったニワをみて、夫の山岸は内心喜ぶより、一層妻への畏怖に似たものが生じたに相違ない。その畏怖に似たものはさらに実践研鑽を通じて、エスカレートされていったものとみられる。

ただし意図はどうであれ、いつもキッカケはY子にあった。山岸が四日市へ行って、Y子との間で感情がもつれると、春日へ戻ってきて、ニワの前で何らかの条件反射を起こすのである。その日も山岸はY子の止めるのも聞かず、振り切って戻ってきたということで、ニワは事態の成り行きを予感していたのであるが、床について間もなく夫に起こされた。そして間借りしている赤堀の稲垣木工所の二階で、否応なしに実践研鑽としての小便研鑽が始まったのである。

山岸は股倉から男の逸物を引きだすと、ニワの顔へじゃあじゃあかけた。こうなるとニワは持ち前の度胸が坐って、何をされても無抵抗のままであるが、小便が顔へかかっては鼻がつまるし、口はふさがれるわけで、息も容易にできない。やっとの思いで耐えていると、「ようでたもんだなあ」と山

岸は膀胱を空にして、だし切って、その夜は終わった。

しかし自らかけている分にはまだよかった。翌朝になって、山からの来客二人の前で、今度は、ニワに「俺の顔にかけろ」といいだした。そのきっかけは、色々話がでて、話に区切りがつけばニワはトイレにゆこうと思っていたのであるが、一つの話が終わればまた次の話で、容易に終わらない。ようやく区切りがついたところで、ニワがトイレに立とうとしたら、山岸は「ゆくことならん」と止めた。「小便はぼくの頭にかけろ」というのである。まさか人前でとさすがのニワも断ると、「なぜできんのか、どうしてもやれ」といってきかない。

そこへ同席の一人がニワを助ける意味で、「そりゃママさん、ママさんの取り越し苦労や、先生が実際にそんな非人道的なことやれというわけないやないですか、ハイと聞ければいいのですよ」といった。すると山岸は急に大声をだして、「こらッ、貴様に何がわかる」とどなりつけたと思ったら、二人を外に出してカギをかけて張り番をさせ、ニワを後ろ抱きにすると、背中へかけた脚を支えに、両掌を組んで「これでもか、これでもか……」と力まかせに腕を引いたものである。

あまりの苦しさにニワは一時失神状態のようになった後に、山岸の頭をみると髪は濡れていた。それで当人は「やったぞ、やったぞ」と喜んでいるのである。

しかしこれまでしてのニワへの効果はといえば、ゼロというよりはマイナスに等しかった。

実践研鑽の後にニワの頭に刻まれたものは、山岸の中の嗜虐的な何かであり、今も心に残るものは口に苦いものでしかない。研鑽が進めば進むほど、逆にニワはいよいよ内にこもって身構えてゆく許りであった。ということは山岸にしてみれば、ニワの頑固はいよいよ頑固になってゆくかにみえるのだった。すると山岸は絶望的になって、新手の方策も考える余裕もなく、暴れだした。恰も無頼漢の

ごとく無茶苦茶に暴れだした。

2

後に山岸はこのことを語って、「ニワに何であんなひどいことをしたかといえば、それは彼女を死なせないためだ」と親しい女性に語っていたそうであるから、俗っぽくいえば「天才の心は計り難いもの」ということになるが、山岸は確かに気狂いじみているようにみえる。山岸には精神病理学の対象になるような面がないではなかった。

彼の頭脳は単に鋭敏であるのみならず、どうも想像的領域と現実とが混濁しているところがあるらしいのである。彼は凡ゆるものについて可能であると思わない代わりに、不可能であることも信じない。例えば人間が魚のごとく水の中を泳ぐことだって、鳥のごとく宙をはばたくことだって、必ずできるとはいわない代わりに、絶対できないとは思わない。できるかできないかは、別の問題であって、少なくともできないと思うことではないとする。

そうした発想は非常にユニークであるが、要するにそのように思える山岸の頭脳の領域があるということで、彼はあらゆるものについての可能性を考えていた。それだけ想像力は強く、豊富だったのである。そしてそれが異状に昂進したところで、時に常人の眼には見えないものがみえたり、聞こえないものが聞こえたりする。いわゆる幻視、幻聴の類でもなく、四次元真実の世界である。そのところで想像と現実とが癒着し始めた。ニワとの相克の中にも、それが現われているのである。それは単なる誤解というものではなく、彼の特殊な頭脳の働き方（異状心理）でしかない、と思われる行状が

みえる。

やはり結婚当初の頃であるが、山岸が帰ってきて、食事はまだだというので、食事の準備をしながら話をしていた。美食家のニワはその日も多くの料理を並べ、あらかた準備が終わったところで飯びつを引き寄せ、茶碗をとろうとしたところが、その途端山岸は「なにッ」といいざま、その一杯料理がのった御膳をひっくり返し、御膳でニワを叩き伏せてぐいぐい押さえつけたことがある。

御膳の上には丁度そうめんのおつゆがのっていて、ニワはそのそうめんをもろに頭からかぶってしまった。あまりのことに「どうしたんですか」と下になりながら夫に聞くと「茶碗をぶつけようとした」というのである。ニワにしてみれば実に心外なことで、何とも不審の思いに囚われた。

また横になって寝ていた山岸が急に飛び起きるや、ニワを壁に突き倒した。ニワはいきなりのことで、あまりの痛さに壁に頭をもたせかけたままこらえていると、さらにその上に馬のりになってきて喉をしめつけるのである。やっとの思いで「何かあったんですか」と聞くと、山岸は「あんたがかみそりで死のうとした」というのである。そして起き上がるや、「こちらの眼をみろ」というので、そのとおりにすると、「この涼しい眼が曲者じゃ」と、ペッペッと唾をニワの顔にはきかけた。

何れにしてもニワには全く思い当たらないことばかりで、一体夫がどういう神経の作用でそうなるものやら思いもつかなかった。ただしその場で全くその意志がないことを説明すると、山岸も了解はしてくれた。山岸には異状な心気昂進において、時々こうした空想的直観と現実とが短絡する瞬間があったのである。ただしそれもこれも元はといえば、ニワへの愛情のひずみがなしたわざといえるので、つまりは自らを神経異常に陥らせるまでに、ニワに打ち込んでいたということである。

山岸はニワにおいて初めて、百パーセントの愛を得た。求め求めてきたものに遂に出会えたと思ったのである。そこにいわばこれまでの余裕ある演技者（自我二重化像）としての自己が、大きくバランスを失ってきた原因があるのであり、理性的自己が感情的自己と重なった部分において激しくショートしていたのである。山岸は自ら人生の役者と称するが、役者になり切れない部分での乱暴狼藉でもあった。恐らくは山岸としても、これが六十年の生涯での処女体験でもあったろう。処女体験は処女体験なるが故に、自身でも行状がエスカレートして辿りつく先も見えなかった。

しかしそういうことではありながら、あくまで山岸の目的とするところは明瞭なのであって、要するに山岸は完全無欠の一体夫婦の完成を目指して、神経を極限にまで使っていたのである。「何が何でもこの一体夫婦を完成させねばならない。……そのことでまた真の一体社会の実現が可能である……」と。

山岸の言によると、「いわゆる世の我執人のやる凡てのことは誤りである」そうである。それ故どんなに形だけ理想社会らしきものができても、さらに完成すべき一体生活の手本が見当たらないことには、我執は徒らに盲動するばかりであるとみていた。現実に百万羽養鶏をやってみてその徴候がみえだし、一刻も早く一体の真内容をみせる必要があった。そういうことであるからして、駄々もありきたりの駄々と違って、恐ろしいまでの様相をとってくるのは必然であった。

そこにいわば山岸の我執というものの、考え方の特異性もあるのである。我執とは単に可視的な利己的言動を指すばかりでなく、その潜在的心理をも我執とみる。我執を産みだす卵である。感情の世界を可能な限り単素化して、思い込み、きめつけ、囲いなどをも我執とする。そうした感情の世界は全て現象として、利己的現実を顕在化するからである。

頑なに思い込む、人をきめつける、自己を狭く囲う。そこから怒り、怖れ、こだわり、捕われの心

情も派生してくる。怒り、怖れ、こだわり、捕われがあれば、やがて闘争となる。

山岸はムラッと嫌な気分が出てくれば、それをすぐさま摘まねばならないとしていた。もっとつきつめればこの世の本性は快適一色な筈で、一片の不快、ためらい、嫌悪の情もあってはならないのが本当である。チラッとでも心に否定的な影がでたら、それで何もかもがおしまいといういい方をしていた。

それであるから、ニワが夫を送りだして、ホッとしたり、ヤレヤレと思うだけでもそれは一体拒否の信号とみる。その心理をみるに敏な山岸は、ニワがどんなに表面的に愛想よく送りだしても、一片の負担の心理を感じとっただけで、忽ち察知して、鏡台を蹴飛ばすやら、火鉢にオーバーを放り込むやらして、大げさな身ぶり表現をとったのである。

まして直接の愛情の拒否ともなればなおさらのことである。四日市のY子の宿で、ニワに愛撫することを拒まれてこたつの天板を持ち上げてぶつけたのがそれで、山岸は触発的に暴力的な反応を起こした。かくして暮れも間近い十一月から十二月にかけて、愛研の場となったのである。

場所は菰野の見性寺、世紀の大研鑽会ということで、関係者十六名が集い、十一月二十八日から延々二週間に亘って行われた。むろんニワもY子も同席しての、複数関係の検討のための愛情研鑽会となったのである。

その時の記録テープはダンボールに二、三箱もあるほどであるが（山岸は自分の言葉の保存と確実性を期するため、一切合財何でも記録せよとしていた）、冒頭部分で山岸は、「意識的に感情を表現に現わさないことにしている」「百万羽の完成を目指す前に絶対解決したい問題である」といい、ことばの実証として、Y子は「交替します」、ニワは「後退します」ととったという、お互いの了解違いがあっ

たことが披瀝されて後、次のような会話がなされている。

山岸　山岸ズムには結婚するとか別れるということばはいらない。何ものにも束縛されない自由である。結婚の重大要素の精神面において誰でも一人以上の人を愛する。こういったからこうしなければならないという窮屈なものでなく、自由といっても人間社会の道徳、倫理、法律で決められたものではない。さりとて不安なものでもない。頽廃して社会が安全に保てぬものでない。正しく間違いのない自然界の営みによって、よりどころない月、星、地球が宇宙に間違いなく動いている状態と同じものが人間同士の結婚においてもあると思う。

結婚の根本条件として精神的に愛情を持つことを重要視しながら、瞬間的な肉体的条件に何故こだわるのであろうか。無軌道と見える中に本当の安定がある。安定した結婚に約束はいらない。本当に愛し合っているものが肉体を求め合っている時、それを拒み妨害する何ものもない。双方に愛情が育まれている時、その花を咲かすことが自然の真理だと思う。肉体の結合は花である。本当に愛し合わないところのものは、本当の花ではない。

きめつけ、押しつけの愛は窮屈で仕方がない。もっとも身に近いものに自由がほしかった。もっとも愛し合い理解し合う間で、もっとも不自由であったことは耐えられない。相手と遠く離れることによって、ますますその好さがわかる。離れられない気持ちとしばる気持は別である。

福里　真実の世界は見えているが飛び込めない。ついてゆけない力なさを感じる。

山岸　お玉杓子として成長してきたことを、わかってほしい。だから過去にできなかったら、今も将来もできないというきめつけはいらない。できてもできなくともよし。

福里　複数で離れていては、心がくたくたになる。主なき時はふぬけの状態だ。

山岸　今の精神状態では肉体的に相寄れない。私心、我、計画なしに、自然に融け合える状態まで時を待つ。Y子の場合は社会的に考慮している。多夫多婦の立場で、Y子がより幸せになれる愛人ができた時は喜ぶが、よろめきで不幸を招かせたくない気持である。

私が願うことは、ニワ子にもY子にも安定してほしいことである。私は生き長らえたくない気持で、生への執着はない。三人ともそれであるだけに危ない。人間同士の世の中でみんなよく融け合ってほしい。二人が融け合うために、私はどんなことでもやる。〝Y子は汚い〟ということばをとり消してやってほしい。その時はこの淋しがりやでも、一人で暮らしてゆく。

福里　そのことについては本当にすまない。しかし今抱き合ってみる自信がない。

Y子　〝私が汚い〟ということばは聞きたくない。一度聞いた私の心には、消え去らぬものを感じる。

山岸　もっとも愛するニワ子から、もっとも愛するY子を非難された時の気持ち……。もっとも身近なものが一体になれずして、愛和の実践はない。

福里　今までの研鑽で根尽きた状態で、到達し得たことは、複数という課題が解明された全人の喜びである。別れてゆく後の心境……私を抜きにした心境……。自分の愛情は真情だと思うものがあった。すがりついていって離されることが恐ろしかった。だからそうでもよいから顔をみせて下さいといった。

山岸　ニワ子のために死んでも構わぬと思う愛情によって、Y子への愛情が空っぽになるものでない。三位一体の愛情である。夫婦の愛情は固定したものでない。うわべだけの愛情、意識した愛情はまだ本当でない。無意識のものは自分にも人にもわからぬ。現われたものはその一端にすぎない。目

に見えないもの即ち愛、この愛の燃えだしたもの即ち情である。

ここまではよかった。が、その後がいけない。というのは、研鑽会半ばで山岸は名古屋の鶴舞公園で講演があって、ニワをしばりつけておいてでも外へ出すなといいおいて、出かけていった。その留守の間、ニワはY子と美和子の三人で歌をうたって遊んだ。普段でも金切り声をあげたことのないものが、こうして睦まじく愉しんでいるのであるから、周囲の人は喜んでいた。

ところが名古屋から帰ってきた山岸が、その間のテープをじっと聴いていて、そのうちに、「もういいからとめてくれ！」と絶叫した。歌を聴いて、「何が機嫌がいいのか、何が調子がいいのか、家内はすっかり心が離れてしまっている。それがわからんのか」というのである。「この眼を見て下さい」とニワがいうと、「その眼が曲者だ！」という。

結局、「どうせ別れるなら殺して死ぬ」といいだした。ポケットに何やら意味ありげに手を突っ込んでいるので、ニワはナイフか何か持ってきて、本当にやる気だなと思った。それで、「本気でやるつもりですね」と問うと、「本当にやるつもりだ」という。

「それならば他の人をケガさしてもいかん。側にいかさして貰いましょう。思いっきりやって下さいよ。仕損じないようにやって下さいよ」

というわけで、ニワは着物の襟を開いて、ここをやってくれと許り首を差しだした。

すると、山岸は「よしッ」と立ち上がって、ニワの襟首を掴んで立ちはだかった。研鑽会の出席者も驚いて、総立ちになった。その瞬間、娘の美和子が「ママをやるなら私を先にやってェ」と中に飛び込んできた。山岸はその時物凄い形相をしていたが、美和子がそういうと途端に、何ともいえない

優しい眼をした。それはニワには後でわかったことであるが、山岸の生命の果てんとする間際に、「みんな仲よくするんだよ」といった時の眼と同じ眼であった。

これは冷静だなと直感でわかった。しかしその後がまたこわい顔になった。ニワの方を向いて鍾馗のような顔になっている。それでも一遍坐り直して二言、三言会話するうちに、また火がついた。山岸はバタンと障子を開け放したと思うや、ニワの襟首を掴んで一間廊下の方へずるずる引きずってゆき、そのままニワをひっ抱えて縁から庭に向かって飛び降りたのである。

縁といっても見性寺の縁は人の背の丈ほどもある高い縁である。しかも落ちた先がよくなかった。山岸はわざわざ庭の雨だれ落としの大石を選んで、飛び降りているのである。一命はとりとめたものの、後でみると、ニワの地の厚い着物は羽織、着物、長襦袢と三枚とも破れ、石に当たった方の半身は真っ黒になっていた。

こうした現実の日々の挙句の果てに生れたものが、前述したかの熱湯事件であったのである。そこに至る二人の経緯は、極めて必然的であったのである。

子供も山岸の希望通りできたものの、ニワは秘密裡に処置してしまった。最初の子供は、じっとしている間もない過労がたたって高熱がつづき、三カ月で流産してしまった。その後に吐血した。二度目の子供は自分で堕した。木から飛び降りたり、雪の中で転げ回ったりした挙句に、担架で病院へかつぎ込まれた。事情を知って山岸は「惜しいことしたな」と残念そうに洩らしていた。

この胎児の処置の実践が、ストレートに熱湯事件の行為にまでつながってしまったのである。逆にいえばニワをしてそこにまで追いつめた山岸が問題であるが、当人の心理状況を読むことは大変難しい。暫時的にしろ山岸は、本当に狂疾の世界にいたのかもしれないのである。しかし結論的にいっ

て、例え狂ってしまった山岸であっても、最後のギリギリの一線においてやはり意識の人であったとみるのが順当であろう。

四日市の街を裸で走ってこいといわれて、最後の一枚をとり払おうとしたニワに、「そこまで！」と押しとめた山岸、それは明らかに意識の人であったといわざるを得ない。病院におけるニワへの「私心がない」というほめことば、「だがそれが我だよ」という指摘においても、事件に対する山岸の意識性を感ぜざるを得ない。ニワとすれば、その意識という調節機関がこわれたとみればこそ、強行に訴えたわけであるが。

山岸は病院で、ニワのことを話して「お湯かけて逃げてゆくニワの後ろ姿は、まるでふくら雀のようやったなあ」と洩らしていたそうである。顔面の皮膚が垂れ下がるほどの火傷を負ってなおそれだけの余裕のある人が、意識を全く失える時があるとも思えない。

その意味では山岸は徹頭徹尾演技者であった。自らもいう通り、人生全体を舞台とする役者稼業に徹していた。どんなに阿修羅のごとく暴れている自分にあっても、その阿修羅のごとく暴れている自分を役者とみる、もう一人の自分の眼というものがあった。客観的自己は無限に主観的自己に近づいて、遂に重なることはなかったと思われる。

それではその意識性において、山岸は何を意図していたかといえば、いうまでもなくニワとの一体生活の完成である。大衆の前でわざとニワを面罵し、破廉恥な我ぬき研鑽を行ない、長期の愛情研鑽会を開いてまだ一体になれない山岸は、「もうこれまで、もうこれまで」と歯がみしながら、今度こそ生命を張ってでもと、実践研鑽しようとしたのが、岡本、中林、娘夫婦の家の火つけと人殺しであった。みな親しい人ばかりである。ニワがもっとも情を感じている、命を奪うことなどとてもできな

い人ばかりである。できない人だからこそ、山岸はやれというのである。

ここにおいて、山岸にはニワがどんな行動をとってもよかった。まさか熱湯をかけられるとまでは踏んでいなくとも、追いつめられた心理が遂に肯定的に行動しようが、否定的に行動しようが、行動すればどちらでもよかった。その行動自体において、我執を指摘すればよかったのであるから——。

山岸ズムでは「ハイ即実行は誤りである」といわれる。いわれたことを「ハイ」と聞いて、そのまま実行するのはダメなのである。それでは単なる盲従に過ぎない。最初の「ハイ」は絶対無条件で聞いて、その次に研鑽があって行為がなければならない。研鑽なき独走は、いかなる善意において行われようとも間違いなしのである。

具体的にニワはどのような独走的我執を発揮したかといえば、ニワはみんなのためを思って、山岸の暴言を断念させんと熱湯をかぶせた。（もし本当に火つけを実践したならば、山岸は直ちに阻止の追手をさしむけただろう）その限りにおいては山岸がほめたように、私心のない行動ではあった。しかしそれが自己の考えだけで行われたところで、公を私に転化してしまっているのである。いってみれば私我に対するに公我である。私我も公我も我であることには変わりはない。

山岸はそこで、火傷の床にあって「だがね、それが我だよ」とつけ加えたのである。平たくいえば〝義憤〟という名の我である。

山岸はこの義憤が、少女の頃から破邪顕正の国を夢みてきたニワの、アキレス腱であることを承知していた。プラスは絶えずマイナスにも転化する。ニワの弱い者いじめを絶対に許さないとする、そこのところで、むしろ私心を見つけることができるし、それが執着であり、我執の現われともなる。我執としての義憤は必ず、周りの誰かを傷つけることを意味するし、拡大されればやがて血みどろの

戦闘となるはずのものであった。もし山岸がそのような義憤の在り方を、最初から自身の肉体が傷ついてでもニワに教えてやりたかったとすれば、その意図において鬼気迫るものを感ぜざるを得ない。

山岸のこの我執に対する特異で鋭敏な感覚そのものが理解されなければ、山岸の生活の瞬間的な転換の意味もなかなかわかりようがない。彼は我執の千遍万化のありようを、つまりは自己の一点においていた。山岸の日頃のことばによれば「我執人には無我執人は見えないが、無我執人には我執人のすべてが見える」のである。

義憤、公憤の意味あいを押し広げてゆけば、家族愛や愛国心や民族魂などと呼ばれる集団精神も、一見正しいように見えて、実はそこに潜んでいるものは我であることがわかる。集団愛もまた公我である。集団愛は、みんなのためを思っているかのごとく見えて、実は自分の属する集団以外は敵となる。同様に判じてゆけば、みんなのためにあるはずの大半の宗教、思想、イデオロギーもまたその背景に我執を見ざるを得ないことになる。非私心の私心の世界である。

中でも強権主義の亡者たるマルクス・レーニン主義は、我執の最たるものであろう。

いや、宗教、思想、イデオロギーのみならず、観念（＝ことば）を持つこと自体が我執である。我執とは所有（固着）するところにある以上、すべての観念の所有が我執である。

しかしかく考え、我執を抜かんと次々テストして、次々ニワにくぐり抜けられた山岸は、最後のテストを試みたものの、それは表面的には成功であるが、内面的には失敗であったことは、ニワのことばに明らかである。あるいは義憤という我執（自信）を切除して、一体夫婦から真正の複数婚の実現に至ることも可能としていたのであろうが、それも裏目に出てしまった。